「間に合ってよかった～相手を思う心」

●「この空の下」

私の連れ合いの体験です。地下鉄が発車寸前、降りる駅だと気がついたのか、男性客がバタバタと周囲の人や閉まるドアにぶつかり降りていきました。その人自身も、とても危ない様子でした。車内は、剣呑(けんのん)で重苦しい空気が流れました。

電車が動き出すと、幼稚園児が、大きな声で、「お母さん、あの人、間に合って良かったねえ」と言ったので、車内の空気は、穏やかで温かいものに包まれたようになりました。

「危ないなあ、早く降りる準備をすれば良いのに」、「ぶつかって乱暴だなあ」と連れ合いは相手を裁く気持ちでしたし、車内も同じ思いの人が多かったと思われます。

しかし、「間に合って良かったねえ」、と言う言葉に、「ああそうだったなあ」と自分の姿が映しだされ、自分の立場で相手を裁いていたと感じ気づかされた、というのです。

2019年7月7日、東京新聞1面の「この空の下」欄に、「就活の帰り道で」という女性記者の寸言がありました。六月の朝、東京メトロ地下鉄内で、目の前の女性が突然倒れます。「大丈夫ですか」と就活姿の女子学生が声をかけ、記者と共に次の駅で抱え、ホームに寝かせ声をかけ身体をさすり、「私たちがいますよ」「大丈夫ですよ」と前向きの言葉をかけました。

気づけば偶然居合わせた乗客たちも、輪唱のように女性に声をかけています。女性を駅員に托し電車に乗ると、「とっさに体が動いたの」、女子学生は朝一番の面接の帰りだといいます。「助けたり助けられたり。社会って結局、そういう場所なんですね」。人生の岐路の就職活動で不安も多いだろうに、晴れやかな表情です。「世の中、捨てたもんじゃないね。励まされたのはこちらの方」と記者は報じていました。

●ハイテク統治国家の未来

同日、東京新聞の書評欄に、中国が崩壊していく未来を民主化･民族問題をテーマに書く北京在住の政治SF小説家、王力雄(りきゆう)著･『セレモニー』が紹介されていました。

内容は、「独裁権力はテクノロジーを手にすることによって恒久的な体制になりうるか」という問題意識から展開します。近未来中国で、党の独裁、人民の監視が、コンピュータによるIDチップで可能になるという想定です。

書評では、「完璧と言える統治システムも、それが党や主席の権力強化といった個人的な思惑の上で築かれ、しかも実際に操作するのが小数の専門家である限り、ちょっとしたきっかけでシステム全体があらぬ方向に導かれ得るもろさをもつ」と論じ、「緻密かつ強大なシステムが持つもろさ」は、「完璧なゆえに」「死角を持ち得る」からこそ、「結局は人間の心が重要」で、「IT化が進むこのような時代だからこそ、むしろ他人への思いやり、自分の仕事を尊ぶ気持ちなど」が「ますます重要なのだ」と結びます。今の香港をめぐる状況を見ていると考えさせられます。

●相手を思う心を育てられる

ITの管理社会が進む中、書評子が指摘した「人間の心」「他人への思いやり」という論理を、身近な人びと(連れ合いや新聞記者)が、奇しくも、他者同士でひしめく人工的な地下鉄の車中の空間で実感しました。合理化で自分の便利さを追い、返って自ら人間性を失していくシステムは、人間が自分の都合を追い求める分別を持つかぎり、なくなりません。また、近未来にはさまざまな形に変化するでしょう。分別は無くせないけれど、それを超える道を示してきたのが仏教です。

善導大師は「平等に一切に施し同じく菩提心を発さん」という願いに生きよと示し、親鸞聖人は、念仏の信心は「願作仏心(がんさぶつしん)、度衆生心(どしゅじょうしん)」(自らを利し、他を利する)というように、自分が仏という人間を成就しようと願う心であり、他の衆生を真実に至らしめようという心だと明かされています。

私さえよければという心が見えてくることで、相手を思う心が恵まれることこそ、私の救いだったと、現代社会のシステムの中で改めて思います。先の記者は、「またどこかでね」とエールを送ったそうです。これも相手を思う心に恵まれた姿でしょう。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます(会費はいずれも資料･茶菓代として千円です)。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。